

たちんぽ

ヒメノの場合



週末——俺はいつもの去勢娼婦の店に行く。

あそこに行くのは2週間ぶりだ。バイトがちょっと忙しく、土日にはシフトを入れられてしまって、ぶっ続けで働いた。

バイトとはいえフルで8時間入っているので残業が無いのを除けば普通のサラリーマン並みに働いている。

……疲れた。気だるい気分。夜の埼玉をフワフワと歩く。

——俺は元気を出す為にコンビニで栄養ドリンクと
1000円のパック酒を買った。この組み合わせは……効く。

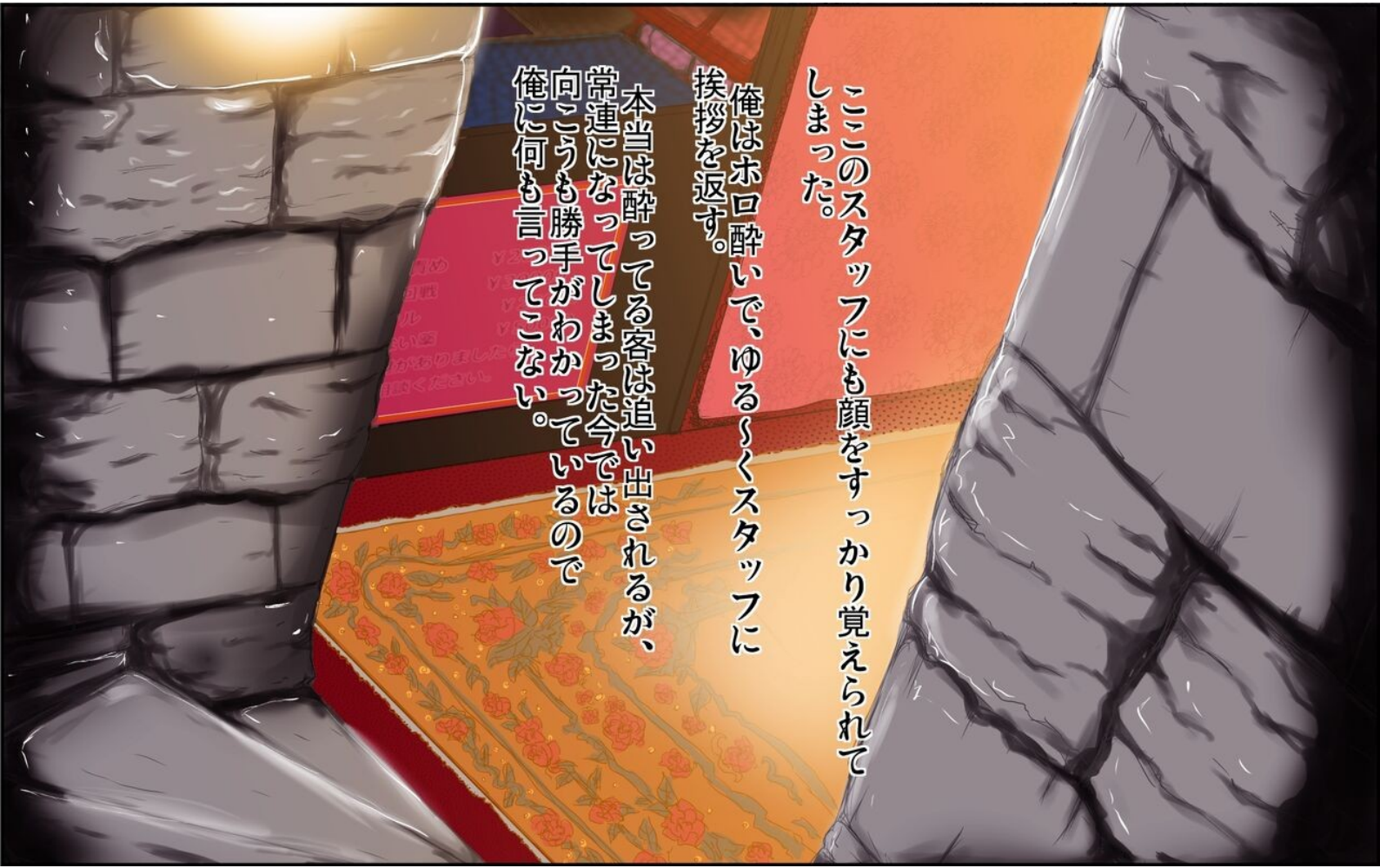








「いらっしゃいませ。
あ、鬼頭様、本日もご来店ありがとうございます」



ここのスタッフにも顔をすっかり覚えられてしまった。

俺はホロ酔いで、ゆる〜くスタッフに挨拶を返す。

本当は酔ってる客は追い出されるが、常連になってしまった今では向こうも勝手がわかってるので俺に何も言っていない。

田中 裕子 ¥20000
 佐藤 健一 ¥30000
 鈴木 一郎 ¥25000
 高橋 美咲 ¥50000
 山田 花子
 清水 健太
 田村 隆夫





——。『ふん……』

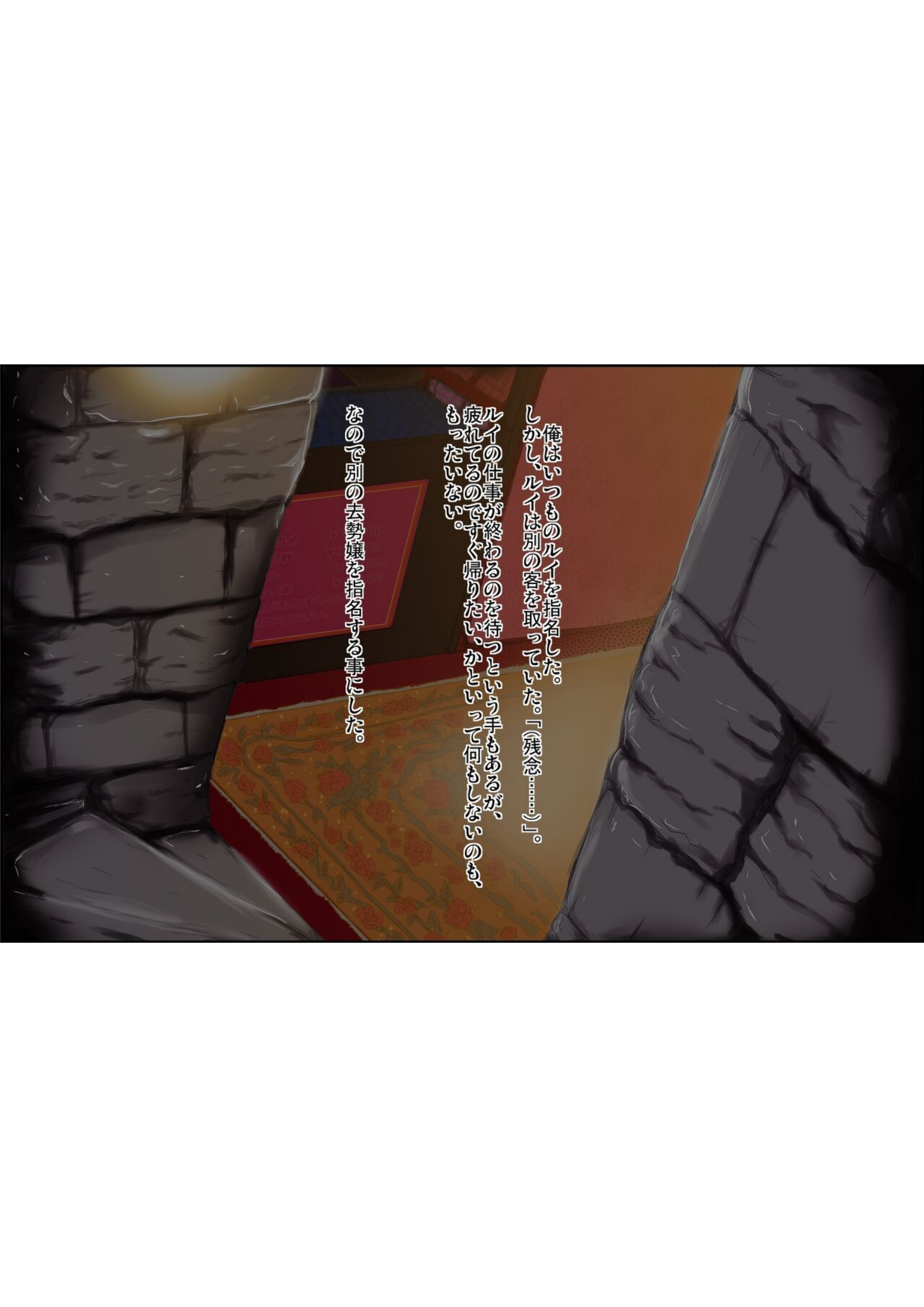
夏が終わり、乾いて冷えた空気が
酔った顔面を気持ちいい。

.....そういや、スタッフは何で俺の名前知ってたんだ？

名乗った覚えはないぞ？ 嬢から聞いたのかな？

.....
おはようございます。おはようございます。

もう「本々パコに火をつける。。。。。。」

The illustration shows a room with dark, textured stone walls on the left and right. A patterned rug with red and yellow floral designs is on the floor. In the background, there is a red wall and a doorway. The lighting is warm, coming from the doorway.

俺はいつものルイを指名した。
しかし、ルイは別の客を取っていた。「残念……」。

ルイの仕事が終わるのを待つという手もあるが、
疲れてるのですぐ帰りたい、かといって何もしないのも、
もったいない。

なので別の去勢嬢を指名する事にした。



マジックミラーの部屋。

客が外から指名したい子を選ぶ為の
ショーウィンドウ。



俺が酔った頭でポケっとしながら
嬢達を眺める。

ミラーの前に人がいるのかどうか
分からない嬢達は素の姿を見せる。



どういう経緯だかは知らないが、
彼女らは生まれた時は男の体だった。

しかしいつしか去勢して男性ホルモンを失った
彼女らは、成人男性の体を手に入れる事なく
歳を重ねている。

もちろん個人差もあって、『男』になりかけた
ような雰囲気、去勢嬢もいる。



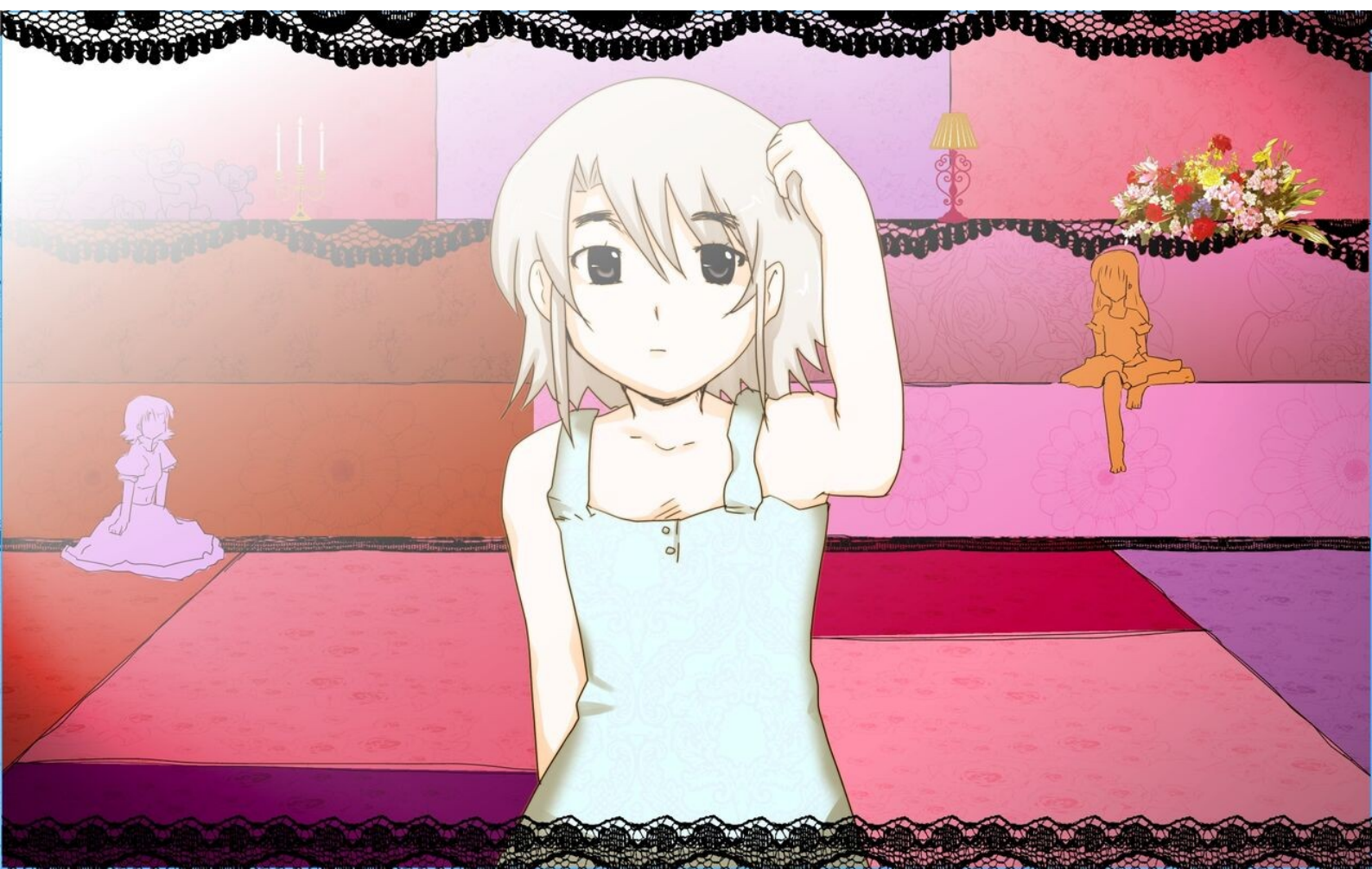
ルイに聞いたのだが、
中には女性ホルモンを注射して、
より女に近づこうとする子もいるらしい。

そうなるともうニューハーフと
大差がない。



——ふと、横を見ると一人の去勢嬢が
マジックミラーの前で身なりを整えている。





俺はそっと、その子の正面に移動する。
マジックミラーなので当然俺には
気づいていないはずだ。





——彼女は髪をとかし、肌のコンディションを
確かめるように顔を左右にゆっくり
動かしながらミラーをじっくりと見る。

そして俺はその様子をマジックミラー越しに
30センチぐらいの距離で眺めている構図。

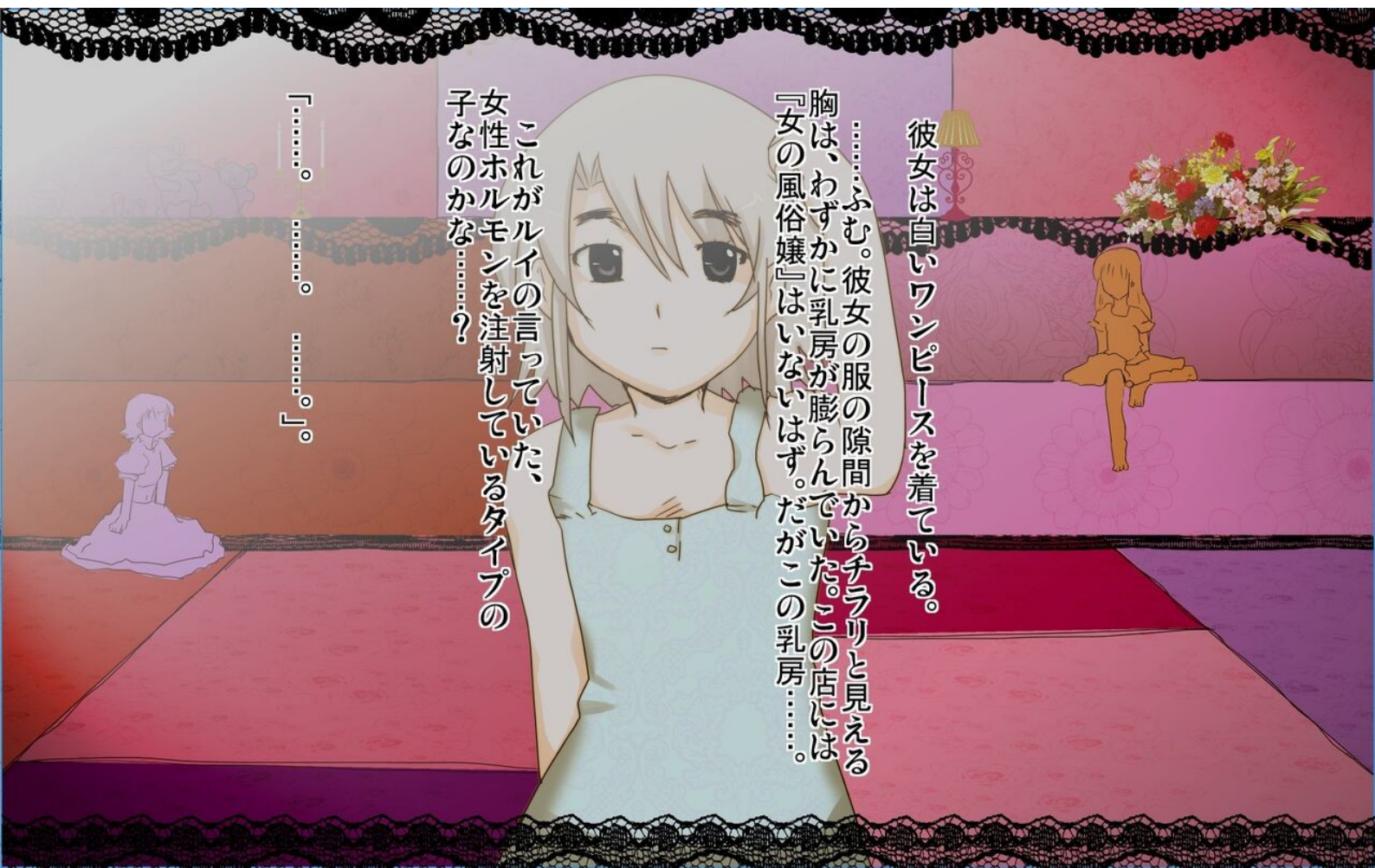
……なかなかの俺好みの子だ。かわいい。

彼女は白いワンピースを着ている。

……ふむ。彼女の服の隙間からチラリと見える胸は、わずかに乳房が膨らんでいた。この店には『女の風俗嬢』はいないはず。だがこの乳房……。

これがルイの言っていた、女性ホルモンを注射しているタイプの子なのかな……？

「……。……。……。」





ざわ...

ざわ...



「え？」

「あの……、お客様？」

スタッフに声をかけられ我に返った。

気が付くと俺は、マジックミラーなのを良いことに
床に這いつくばって、この去勢嬢のスカートの中を
覗こうとしていた。



ざわ...

その様子を、
思いっきり他の客に見られているっっ.....!!
そしてスタッフに注意っ.....!!
.....不覚っ!!不覚っ!!
何という不覚!
ホロ酔いで.....
変態なのがアダになった.....っ!

ざわ...

——俺は出入り禁止になりたくないの
でスタッフに猛烈に謝った……。

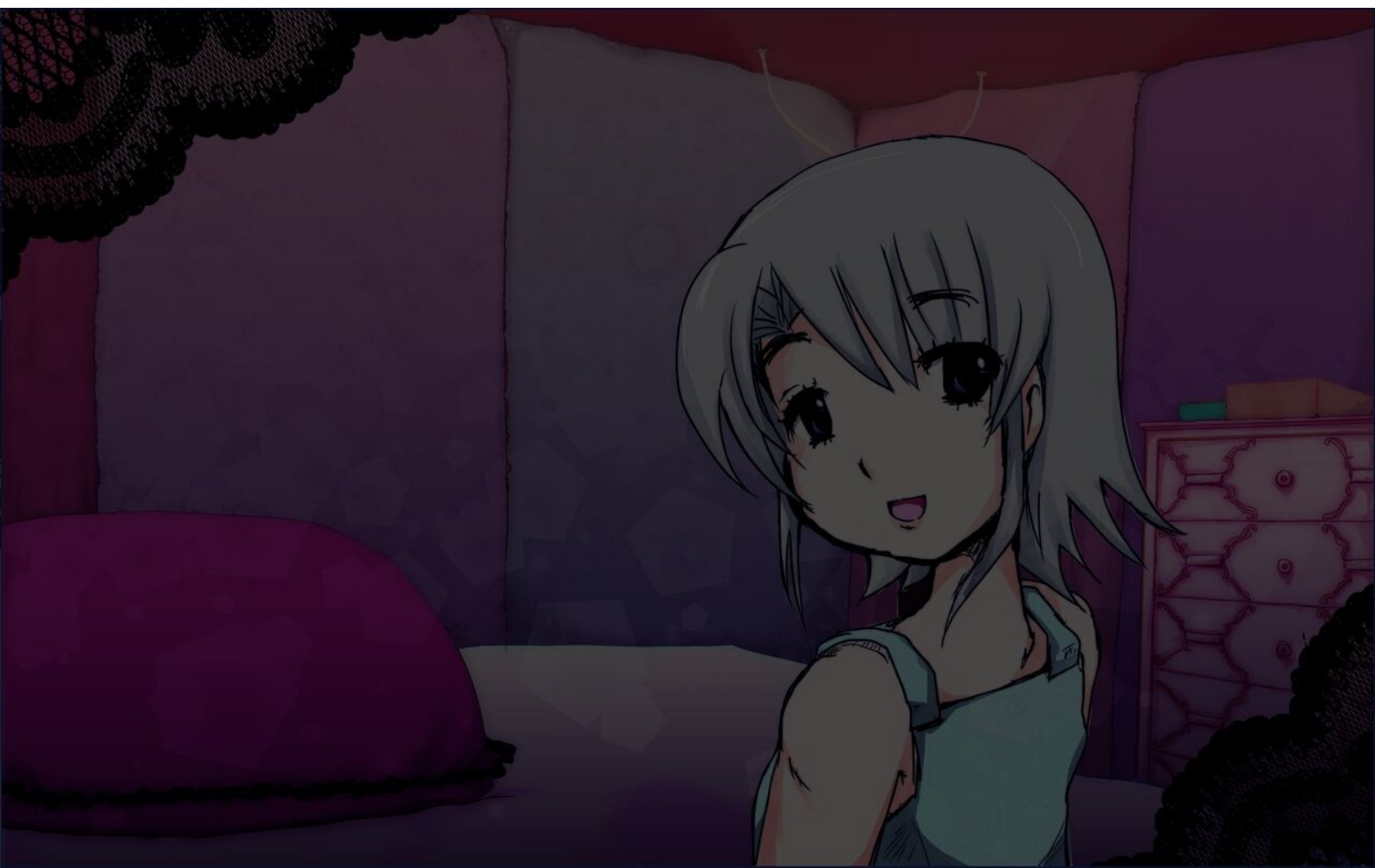














なんとか場をしのいだ俺は、
さっきスカートの中を覗こうとした子を
指名した。

スタッフにあの失態を
ばらされてない事を祈るぜ……。





「はじめまして、ヒメノです」

『ヒメノ』。名前もかわいい感じた。

エキセントリック気味なルイや
クロネコと比べると、いたって
まともそうな子だ。

他愛のない会話を少しした後、
俺は今日も風呂に入っていないので
シャワーで（以下略）





「じゃあ、どうぞ」
ヒメノが俺に股を開く。

その前に、やっておきたい事がある。

俺は、ヒメノの、おちんちんを、めくりあげた。

「きゃ！ どうしたんです？」



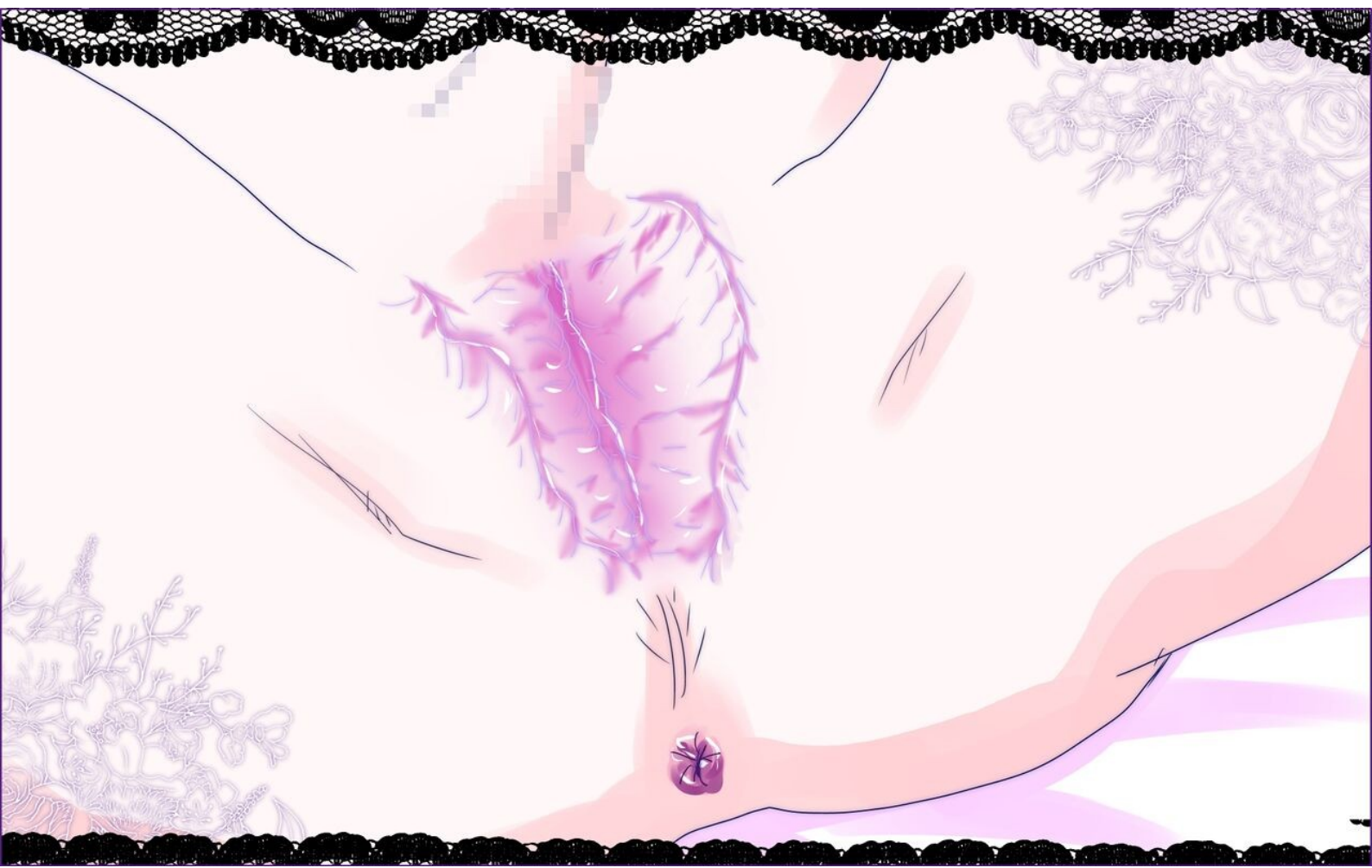


「おちんちんの下の縫い目が気になるんだ」

——今までの経験で、
去勢嬢の手術跡にも個人差が
あるのを知っている俺は、

今日から嬢の縫い目チェックという
変態的な習慣をやるうと思っていたのだ。

この2週間の仕事中に考えた事だ。





ヒメノが恥ずかしそうにしている。

ヒメノの縫い目――。
足の付け根付近、わずかに玉袋を
切り抜き損ねていて、
ぷよぷよとした余り皮がある。



全体的な見た目は、まるでオマンコに蓋をしたかのような形。

ぷよぷよの中央には、うっすらとピンク色の縫い後がある。
俺はその部分を摘んだり伸ばしたりしてみる。



「あの……、恥ずかしいです……」

ヒメノが恥ずかしさで自然と太ももを
閉じてしまい、俺の頭を
挟み込んでしまう。

ふいに、俺の変態スピリットは
ヒメノの縫い目に
むしゃぶりつくと命じた！



「きゃ！ ええ！？」

驚いたヒメノが太ももを強く締める。



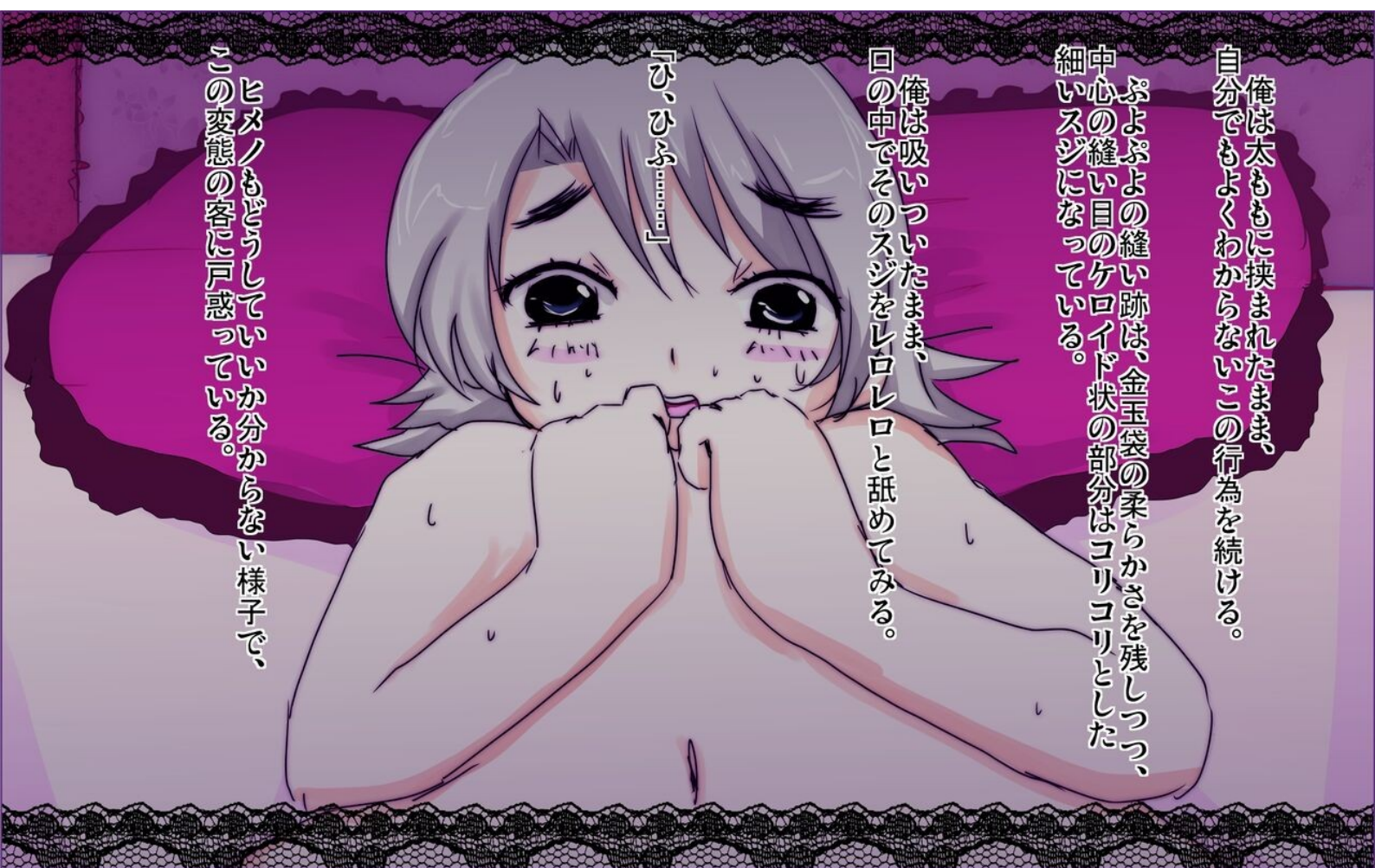
俺は太ももに挟まれたまま、
自分でもよくわからないこの行為を続ける。

ぷよぷよの縫い跡は、金玉袋の柔らかさを残しつつ、
中心の縫い目のケロイド状の部分はコリコリとした
細いスジになっている。

俺は吸いついたまま、
口の中でそのスジをレロレロと舐めてみる。

「ひ、ひふ……」

ヒメノもどうしていいか分からない様子で、
この変態の客に戸惑っている。



——しばらくすると、ヒメノのぷよぷよが
硬くなってゆくのを感じた。

俺にはそれが何だかわかった——。

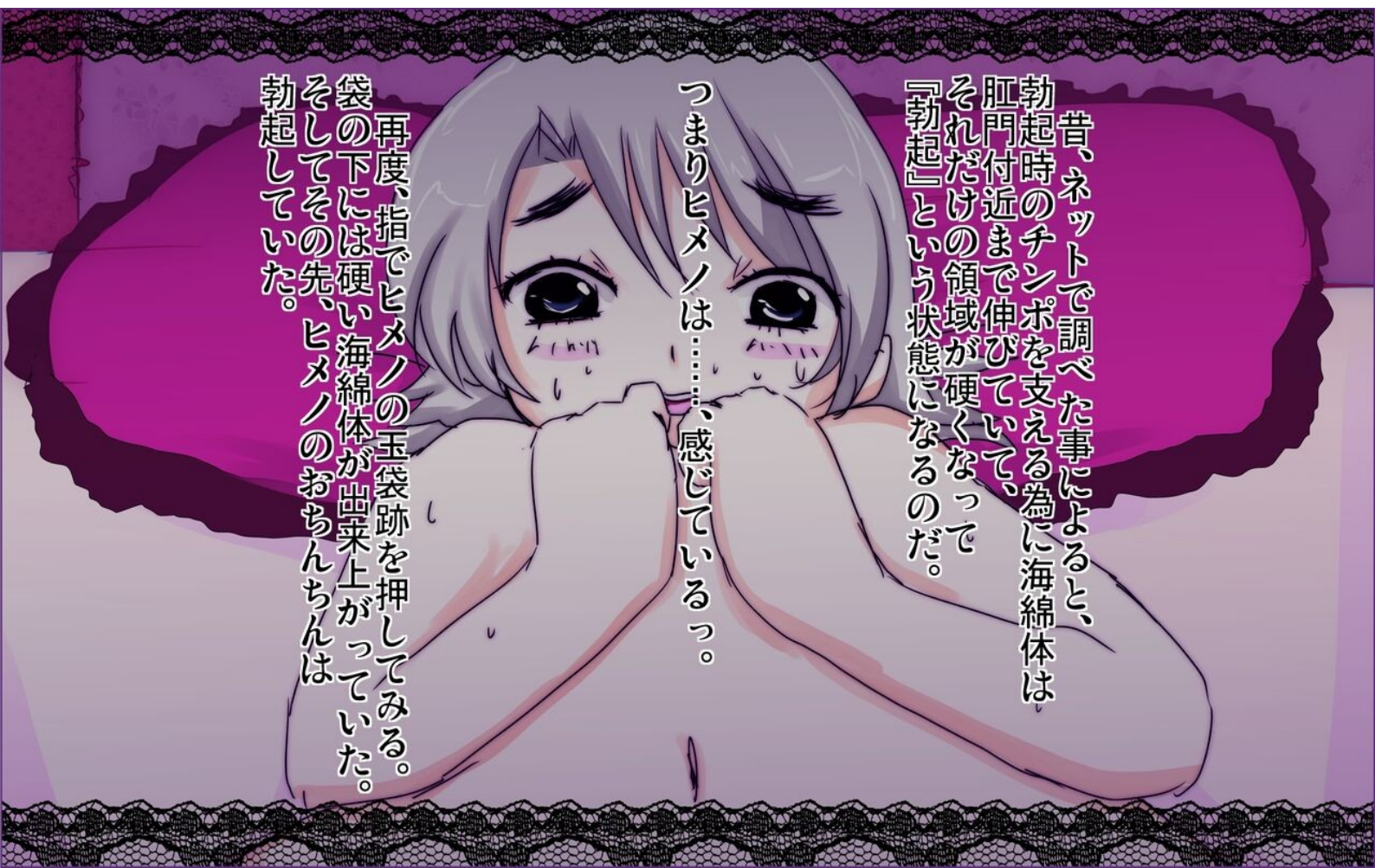
勃起の為に海綿体に血が流れこんでいるのだ。



昔、ネットで調べた事によると、
勃起時のチンポを支える為に海綿体は
肛門付近まで伸びていて、
それだけの領域が硬くなつて
『勃起』という状態になるのだ。

つまりヒメノは……、感じているっ。

再度、指でヒメノの玉袋跡を押してみる。
袋の下には硬い海綿体が出来上がっていた。
そしてその先、ヒメノのおちんちんは
勃起していた。



「もう、いいですか……？」

「おうよ！」

俺はヒメノのアナルに自分のチンポを入れた。

——ここまでドラマチックにヒメノの様子を語っているが、この子自体はノーマルな去勢嬢なので、プレイはいたって淡泊なものだった。





ズチュ、ズチュと単調な音が響く。

ヒメノのアナルは緩めで締りが悪かった。





俺は強い刺激がほしかったので、
ヒメノの尻肉を掴み寄せて俺のチンポを
自力で挟み込む形になった。
尻肉での素股状態。

物足りない俺はヒメノのおちんちんを
しごいてみた。

「あひ！」

昔ルイにやった手だ。懐かしい。

彼女は俺とは初対面だったので、俺が去勢嬢への色々なテクを持っているのを知らなかった。

俺の得意技の二つ『去勢嬢早打ち』をお見舞いする。

——単に、嬢のおちんちんを握ってから15秒ほどで射精させてしまい、腰を抜かせるだけの手コキ技術なのだが。

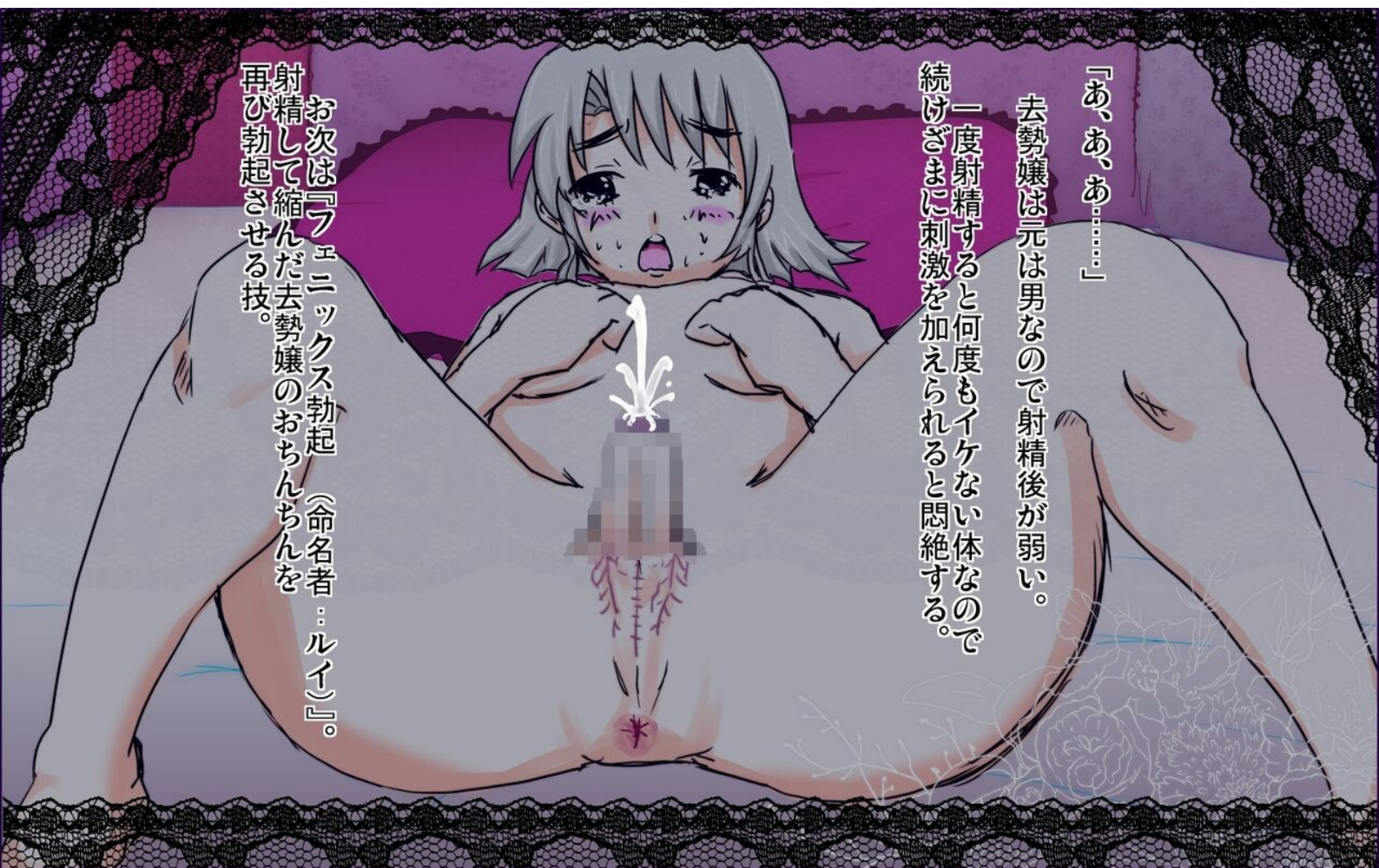


「あ、あ、あ……」

去勢嬢は元は男なので射精後が弱い。

一度射精すると何度もイケない体なので
続けざまに刺激を加えられると悶絶する。

お次は『フェニックス勃起（命名者：ルイ）』。
射精して縮んだ去勢嬢のおちんちんを
再び勃起させる技。





ヒメノのアナルから俺のチンポを抜き、
代わりに指を入れて前立腺に秒間に16回もの
連射を浴びせる事により、去勢嬢の性感が
反応してしまい本人の意思とは関係なく
勃起させる技。

勃起させた後は再び俺はチンポをヒメノの
アナルに突っ込む。そして、おちんちんをしごく。

——俺にも経験があるが、無理やり連続で射精させようとするのは辛い。

チンポが鈍感になってしまっからだ。鈍感になったおちんちんは、なかなかイケず、そして縮みやすい。

だが俺には『フェニックス勃起』があるので、不死鳥のごとく勃起を継続させる事ができる。

ヒメノのおちんちんが縮むとフェニックス勃起、そして俺の手コキと自分のチンポへの気持ちよさ追求。



——今日のプレイは忙しい。

だいぶ忙しい。今日のプレイはライブ感がある。

まるで俺の指はバイブレーター、

前立腺はゲーム機のボタンのようだ。





うおオン
俺はまるで
人間高橋名人だ！













今日もだいたいぶやりすぎてしまった。

ヒメノは強制勃起と手コキを
繰り返され気を失ってしまった。

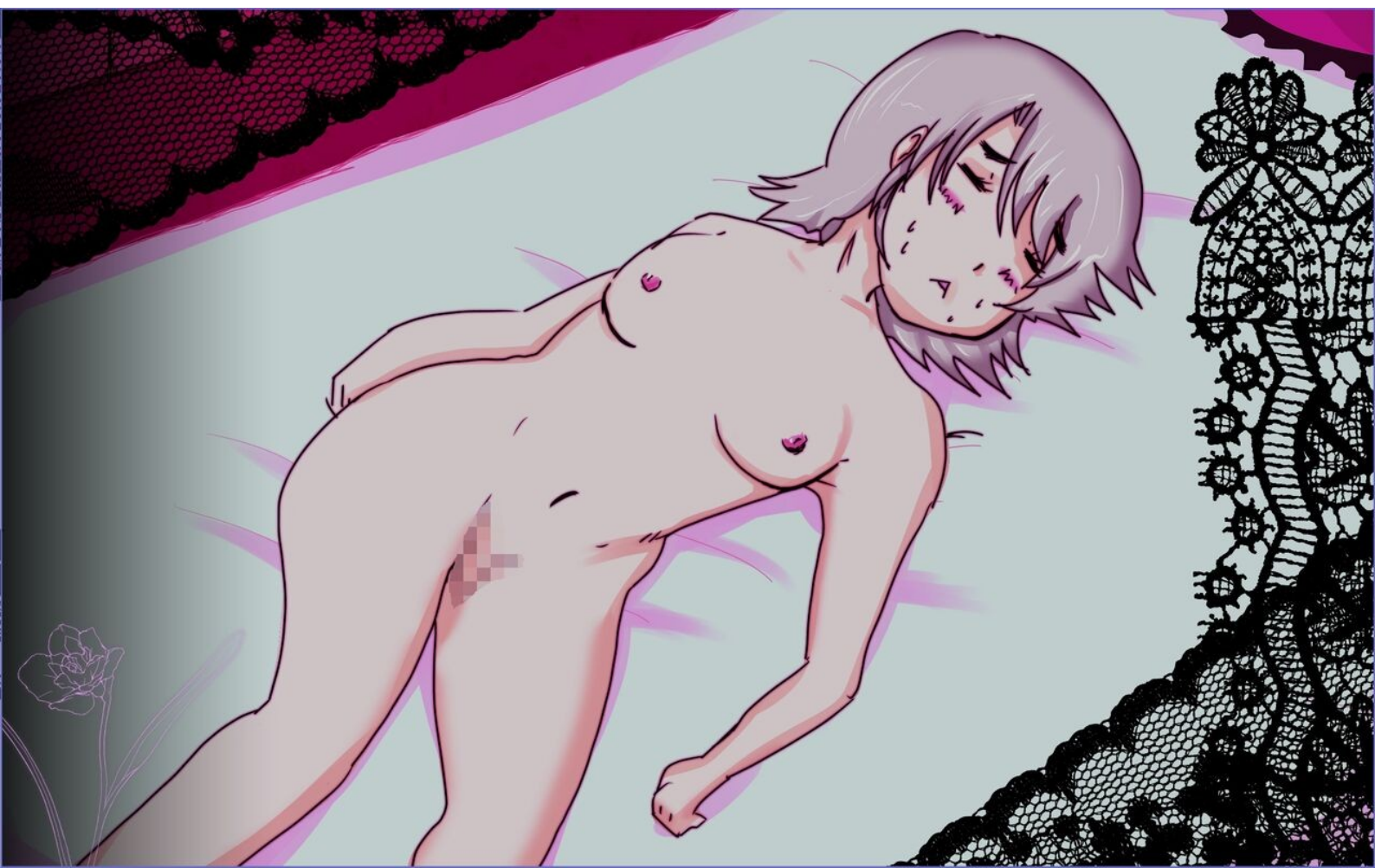
体を揺すったが目が覚める様子が無い――。

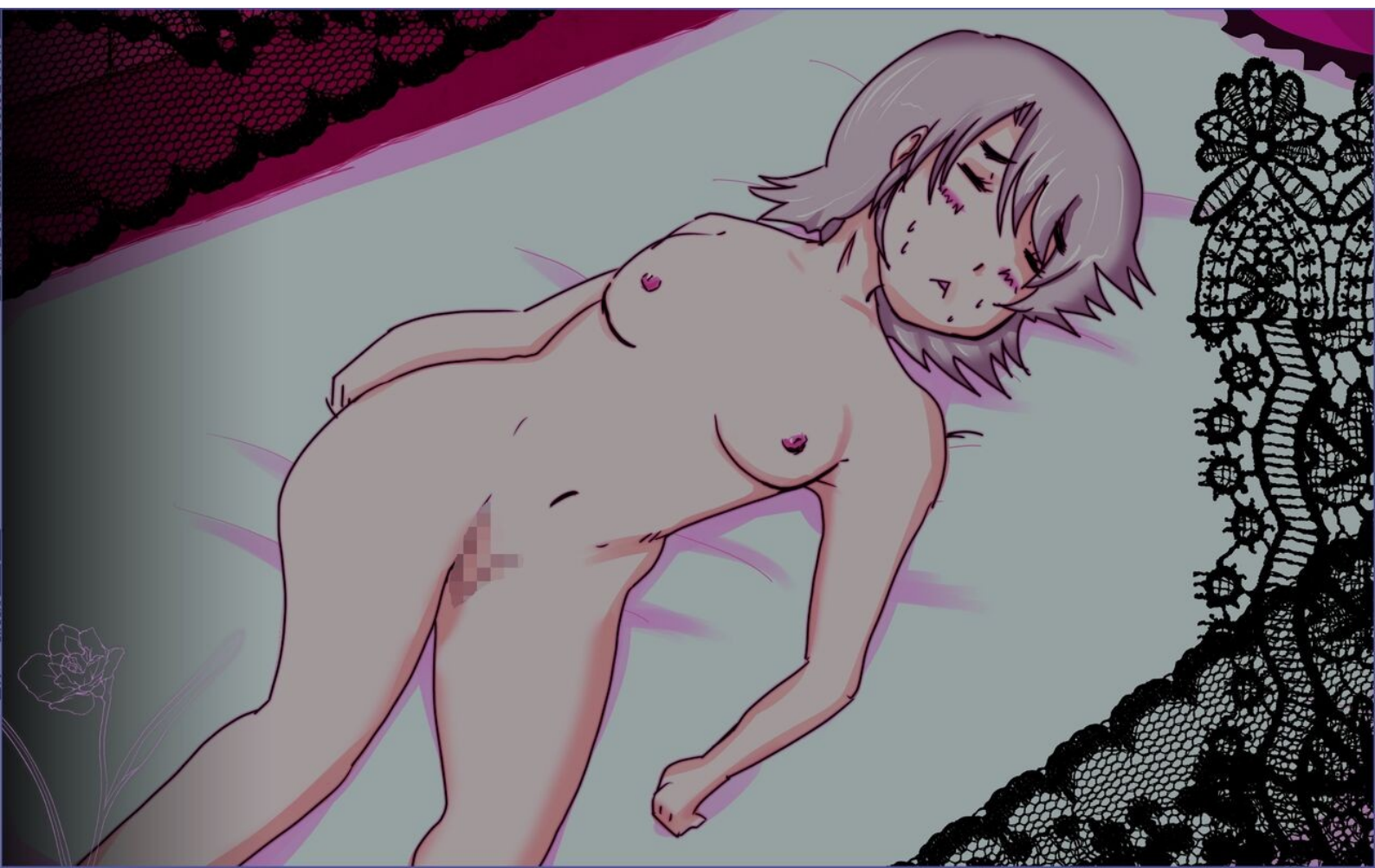


連チャンのバイトと、
ここでのプレイで疲れてしまった俺は、
後の事はスタッフにおまかせして
帰る事にした。

まさか死ぬ事はあるまいて。











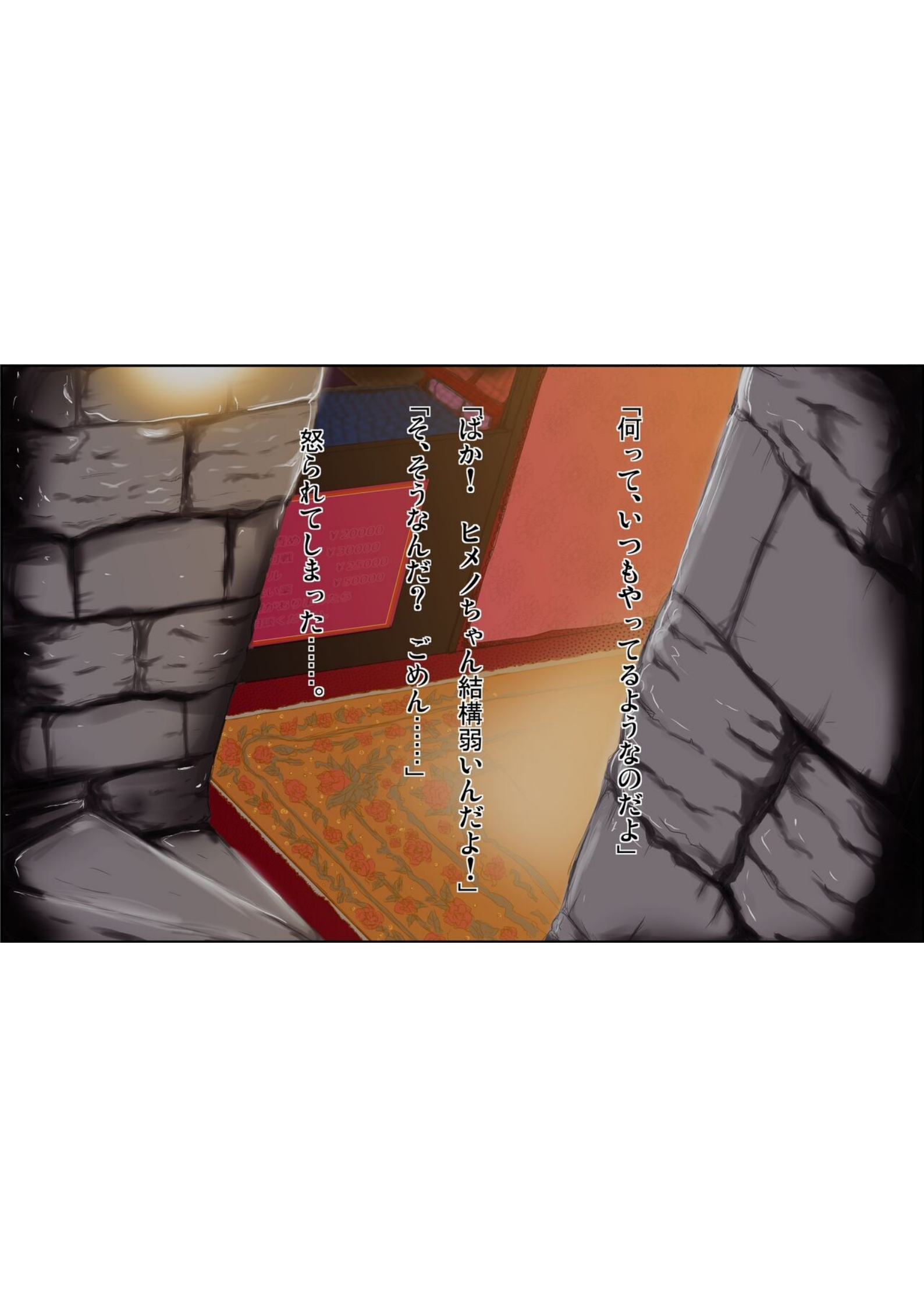
A manga-style illustration of a room. The walls are made of dark grey stone blocks. A red and orange patterned rug is on the floor. In the background, there is a red wall and a pink sign with some text. The scene is lit with a warm, orange light.

帰り際、ルイとすれ違う。

「あれ？今日は別の子だったの？
何さ、言ってくれればよかったのに……」

ふと、ルイが部屋の中でスタッフに
介抱されてるヒメノを見つける。

「あ！ヒメノちゃんに何したの!？」

A manga-style illustration of a room. The walls are made of dark grey stone blocks. A red carpet with a yellow floral pattern is on the floor. In the background, there is a red wall and a blue wall. A pink sign with Japanese text is on the red wall. The text is as follows:

「何って、いつもやってるようなのだよ」

「ばか！ ヒメノちゃん結構弱いんだよ！」

「そ、そうなんだ？ ごめん……」

怒られてしまった……。

やれやれ、今回も失敗してしまったな。

この店にはまだ知らない事が沢山あるようだ。。。。。。

俺はタバコに火をつけて歩く。。。。。

夜の風が気持ちいい。。。。。

ふと、何か良い香りがした。

それは自分のタバコを持っている手だった。

そういえば、手をちゃんと洗っていなかった。

去勢嬢はアナルプレイが中心だから
常に腸内洗浄して中に香水のような物を
仕込んでいる。

ヒメノの香水は桃のような香りだった。
俺はヒメノの肛門の残り香を嗅ぎながら
夜の街に消えて行った……。

終わり